

川津一ノ又遺跡の調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 平重 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7585

川津一ノ又遺跡の調査

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

山下平重

川津一ノ又遺跡は、香川県坂出市川津町に所在する。四国横断自動車道

(高松～善通寺)建設に伴い、平成2年4月～平成3年9月に、(財)香川県埋蔵文化財調査センターが香川県教育委員会の委託を受けて発掘調査を実施した。発掘調査面積は、36,510㎡である。現在報告書作成のための整理作業を行っているが、まだ十分調査の成果をまとめることはできていないことをお断りしておきたい。

当遺跡は丸亀平野の東部、讃岐富士と呼ばれる飯野山の北側の平地に存在する。遺跡概要は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡とまとめることができる。調査区内中央部分に集落遺構が存在し、その周囲に川跡を含む低地が存在する。遺跡の時期的な変遷はまだ十分にはつかめていないが、各時期の主な遺構・遺物は以下のとおりである。

旧石器時代については、遺構は検出されていない。翼状剥片を含む風化の進んだサヌカイト剥片が少量出土している。後世の遺構から風化したサヌカイト剥片が集中して発見される調査区があることから、付近に旧石器ブロックが存在していた可能性がある。

縄文時代についても、遺構は検出されていない。縄文後期及び晩期の土器が僅かに出土しているのみである。

弥生時代については、前期の遺構は検出されていない。土器が少量出土しているのみである。中期は、竪穴住居跡

や溝跡が検出されているが、数は少ない。後期から終末期には、多数の竪穴住居跡、溝跡及び川跡等が検出されている。川跡から多量の土器・石器が出土している。当遺跡の中心的な時期である。以下当時期の竪穴住居跡について若干述べる。

竪穴住居跡群には、各竪穴住居跡の時期的な変遷がとらえやすい一群がある(図2.遺構配置図)。小型方形竪穴住居跡、張り出し付き円形竪穴住居跡、方形竪穴住居跡、周溝付き長方形竪穴住居跡及びこれらと時期の前後関係が明瞭な溝跡が存在する。円形竪穴住居跡の一つと小型方形竪穴住居跡は溝跡より古い。溝跡の枝分かれした部分の末端にそれぞれ方形竪穴住居跡が位置することから、3つの方形竪穴住居跡は同時期のものである可能性が高い。周溝付き長方形竪穴住居跡はこの溝跡及び円形竪穴住居跡よりも新しい。中央の円形竪穴住居跡は方形竪穴住居跡と位置が近すぎることから同時期ではなく、方形竪穴住居跡よりも古い時期とするほうが考えやすい。また、竪穴住居跡に付属する炉跡についてみると、円形竪穴住居跡の炉跡はやや大きく楕円形で15cm程度の深さであり、一方方形竪穴住居跡の炉跡はやや小さく長方形で深さも5cm程度のやや浅いものである。これは、大きく円形の深い炉跡から小さく方形の浅い炉跡へという炉跡の一般的な変化に合致するものである。現在のところ出土遺物からの検証は十分ではないが、円形竪穴住居跡及び小型方形竪穴住居跡の時期、方形竪穴住居跡及び溝跡の時期と周溝付き長方形竪穴住居跡の時期、というように変遷をとらえることが可能である。

なお、方形竪穴住居跡群にとりつく溝跡に方向を揃えた掘立柱建物跡があるが、これも同時期のものと考えられる。

弥生時代後期から終末期の遺物は、ゴミ捨て場と考えられる川跡から大量に出土している。また、当遺跡はサヌカイト原産地の一つである金山のすぐ近くに立地することからか、剥片を含め大量の石器が出土している。原産地からやや離れた遺跡においては、弥生時代後期になると、サヌカイト製石器の出土量はわずかなものになるようであるが、当遺跡においてはかなりの量が出土している。また石器の石材は、磨製石器をのぞくと、100%に近い比率で、サヌカイト製である。

次に遺構が存在するのは、古墳時代後期～室町時代にかけてである。多数の掘立柱建物跡、土坑、溝、木樋を伴う大畦畔、水田畦畔及び土坑墓等の遺構が検出されている。掘立柱建物跡については、まだ変遷を十分把握していないので、ここでは説明を省略する。

弥生時代に川跡であった部分は、弥生時代終末期以降徐々に埋没し始め、奈良時代前後にはかなり埋没が進行し一部で水田が作られ始めたようである（部分的に古墳時代終末頃の流路跡が存在する）。木製樋管を伴う大畦畔跡は当時期の所産である。大畦畔はおそらく集落の存在する微高地間をつなぐ畦道状の遺構であり、これを横切る形で木製樋管が設置されていた。木製樋管部分の上部構造はまだ検討中であるが、樋管に盖板が存在しない、開渠状態であったと考えている。つまり橋が存在していたのであろう。水田については、異なる調査区で鎌倉時代頃と考えられる畦畔も検出されている。

中世の遺構としては、土坑墓がある。かなり後世の削平を受けており、深さが浅く、人骨の一部が残存しているにすぎない。出土遺物は平安時代頃の須恵器の小破片のみである。付近に中世の掘立柱建物跡が存在することから、おそらくいわゆる中世の屋敷墓であろうと考えられる。出土人骨は下顎の部分の残存状況が比較的良かったので、現在香川医科大学法医学教室に鑑定を依頼している。

また鎌倉時代頃の遺構として、径60cm程度の土坑に大きな鍋をうつ伏せして、その中に土師器の杯を2つ置いた遺構が検出されている。杯の一つは口縁部を上にして、一つは口縁部を下にして置かれていた。性格については調査中である。

古墳時代以降の遺物としては、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、中国産陶磁器、緑釉陶器、灰釉陶器及び帯金具等が出土している。また、川跡からは土馬が出土している。

以上、川津一ノ又遺跡について簡単に述べてきたが、まとまりのない報告になってしまい真に申し訳なく思っている。なお遺構については、現在ほとんど未整理状態であることを、再度お断りしておきたい。ここで述べたことも今後修正する必要があるかもしれない。報告書は平成9年3月に第一分冊として刊行される予定である。

参考文献

香川県教育委員会，(財)香川県埋蔵文化財調査センター，日本道路公団高松建設局『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』1991